

氏名(本籍) カラム・ハリール(エジプト)

学位の種類 文学博士

学位記番号 博甲第500号

学位授与年月日 昭和63年3月25日

学位授与の要件 学位規則第5条第1項該当

審査研究科 歴史・人類学研究科

学位論文題目 日本中世における夢概念の系譜と継承  
—日記と和歌を中心として—

|    |         |      |    |    |
|----|---------|------|----|----|
| 主査 | 筑波大学教授  |      | 芳賀 | 登  |
| 副査 | 筑波大学助教授 | 文学博士 | 熊倉 | 功夫 |
| 副査 | 筑波大学助教授 | 文学博士 | 池田 | 元  |
| 副査 | 筑波大学教授  | 文学博士 | 宮田 | 登  |
| 副査 | 筑波大学教授  |      | 廣神 | 神  |

## 論文の要旨

本論文は日本における夢概念の歴史の変遷過程を、その実質的意味をもつ中世を中心にすえて、古代から現代までの展望を示したもので、1,000枚以上に及ぶ作品である。本論は夢を深層心理学や精神分析学的方法をとらず、歴史学的研究の対象としたところに新しさがある。したがって夢の内容定義を予め行う形をとらず、夢を史料に即し、時代的背景や時代精神との関わりの中で見て行くことにより、その歴史的役割や定義を浮び上らせる方法をとったものである。

本論文の構成は序において研究史の回顧と共にふれてある。第一章古代における夢概念の変遷—中世との接点を求めて—において、古代における夢概念の吟味をし、シャーマニズムや呪物信仰との関連から、神のお告げをうける場とのかかわりで夢・夢想・霊夢などを『日本霊異記』や『今昔物語集』に展開を求めている。また古代人の夢を記紀万葉の夢の考察や古代の日記等を対象として行い、とくに記紀を通じて、古代天皇の神との交信を神牀を設け、祈誓(うけひ)を求めたこと、それが個人としてでなく国政とのかかわり、国家との関係であることを明らかにした。万葉では、恋愛や願望が夢の形をとり、万葉人は夢を単なる無意識の産物と考えていないこと、むしろ祈誓と考えていること、万葉の和歌の中に夢は56首もあられ、大部分は夢に恋心を托し、相手を想っていると自分の夢に相手が現われると考えている。さらに『源氏物語』では夢が男女の愛のあり方とのかかわっている。

第二章では古代～中世変革期の夢をとりあげ、平安時代末期には中世的夢概念の萌芽をみとめる。

夢は神との交渉によるものから、より内面的なものへと変化している。その背景にあった往生志向・延壽志向が特に盛行する。その具体例は『中右記』にあらわれる。その他『中右記』『吾妻鏡』『平家物語』『平治物語』等を具体的史料として考察を加えた。

第三章は、本論文の中心的課題をあつかった部分である。そして中世人の夢を、和歌と日記を具体的史料とし、夢や夢にかかわる語彙の分析や夢のもつ価値や意義、役割を時代背景・思想等から論述し、中世人の夢の特徴を究明する。この章では定家の和歌革新、とくに新古今に焦点を当て、純粹芸を求めて新儀世界で余情妖艶、文芸至上の美追求の世界があったこと、こうした事実を日記『明月記』の夢の記事の中に求めた。定家は夢を信じ、その精神生活との深いかわりの中にその心情があらわれている。その上で定家のはかなさ、悲しみ、彼なりの宗教観、無常観、夢幻的世界を描いている。その意味で本論では定家に焦点をあてている。

中世仏教者の夢では法然・親鸞・日蓮・一遍を登場させ、それらの思想が体験した夢とかかわりをもつことを、他力信仰とのかかわりで位置づけ、夢の諸相や夢の社会的影響を分析している。南北朝内乱の時代については、怨靈思想を再び考察の対象とし、『伏見天皇宸記』から『看聞御記』までをとりあげ、夢想の告げの多い点に着目した。この時代になると古代のごとき乞夢のしぐさがみられない。ついで中世末期の公家僧侶の夢に関し、大乘院尋尊、三条西実隆、多聞院英俊、山科言継をとりあげ彼らの体験した夢が精神・思想の発展上、どのような機能を果たしたかをとりあげ、特に一揆による堂塔破壊、仏舎利の夢と期待、赤童子による救済、「夢幻記」の成立等に関して考察している。その中で尋尊と三条西実隆らの時代の差異についても考察を加え、実隆の夢が室町末から安土にかけての夢であることを実証した。その間、数量的分析を行っている。第四章近世人の夢—中世とのかかわりにおいて—では、江戸時代に入ると、夢は文芸的色彩をもって登場し、夢占が多い。これは古代の夢占いとは全く異なり、遊びであり、くらしぶりの余裕であり、実質的意味を喪失し、現実的な夢が多くなっている。安藤昌益等の夢の紹介は極めてユニークであり、将来この種の分析をすすめるものにとって手がかりとなる。第五章近代人の夢は、たとえば幕末志士加藤熙という人物をとりあげ当時の夢概念の移りかわり、維新以降の欧米文化の輸入の中で、次第に非合理的なものへの関心を払わなくなった事にふれている。その様な中で、柳田国男・折口信夫の学問的研究と志向、北村透谷・幸田露伴・夏目漱石のごとき文学者の紹介を、その作品の中からおこなった。

第六章「アラブ人の夢と日本人の夢」は、筆者の立場を示し、今後の研究志向を明らかにするためにもうけたものである。

この章はイスラムの教典クルアーンにおける夢概念、神アッラーは予言者の夢や幻想を通じて間接的に神意を告げている。こうした事例を、日本古代の夢と共通することを意識し、『新約聖書』以来夢の神秘性と宗教性とかかわりと仏教等との関連を意識してとりあげた。これは、このテーマをほり下げるためには、どうしてもこの一章を設けて、比較検討の主体性を示しておくことが、エジプト人として本稿を記した積極的意味と考えていることを示している。

## 審 査 の 要 旨

従来研究成果に対し、本論文は従来夢研究が、一時代に限るか、通史的でも文芸作品や思想家の著述に限定されたものが多いのに対し、サブタイトルが示すがごとく日記を中心にすえ、巻末の参考文献引用が示すが如く多数の史料を駆使して書かれた通史的把握として評価できる。

しかし対象を限定してほり下げるとか、女性や童その他をうきほりにしたり、天皇周辺や夢をみる共同体のごときものをとらえて、より考察を深めるような分析面は甘い。

さらに夢の二重性の考察のごとき試みにより、いささか現象面にこだわった段階づけにつとめ、計量的考察の場合、夢の現実的機能とかかわった分類をすべきこともいささか文字面にこだわりすぎた面も出ている。そうはいうものの、個別研究論文の成果はよくおさえ、かつ時代的画期を計量的におさえ、日記分析として意義づけた面ではよい視点を示している。その上随処にこの面のほり下げをすすめたらという問題提起がちりばめられている。ただそれにもかかわらず、本論文は夢概念の系譜を段階づけることを考えすぎ、歴史的發展をもって系譜をとらえすぎている。

しかし近世以降の現実主義的墮落や近代における実態喪失等を事例をもって展望をなしたところにみえるユニークさは、本論文が包括的研究として価値をもつ面をあきらかにしたものである。

ただ研究史の把握が方法面と関連させる面で浅く、夢の分析の基準が夢を見る人の構成とかかわらせながら、うけとめの変化の基準と関連づけが弱い点とか、微細に考察するともっとほり下げるべき面がないではないが、本論文が意図した通史的段階的把握としてはかなり成功しているといえる。

今後本論文の各章節が、個別分析を通じて再整理され、夢概念の検討がより歴史的分析にたえるだけの理論的検討が加えられて、より深められれば、この内容はより学問的に充実したものとなったであろう。とはいえ、幾つかの先駆的論文の方法を部分的に学びつつ包括的業績として、江口孝夫等の学問的業績よりくわしいものをつくりあげ知見を加えたことを高く評価することができる。と考える。

よって著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。